

聖書：士師記 11：34～12：15

説教題：イブツァン、エロン、アブドン

日時：2014年8月10日

主はイスラエルを憐れんで、8番目の士師エフタを立て、アモン人の手から救って下さいました。これまでくり返し主を捨ててきた彼らとしては、この勝利は永遠に記念されるべきものでした。ところが戦いを終えたイスラエルの上に青空は広がっていませんでした。彼らを覆っていたのはむしろ重くのしかかる鉛色の空でした。主はせっかくイスラエルに祝福を与えて下さったのに、それを自らの愚かさによって暗いものに変えてしまっている彼らの姿がここにあります。

まず一つ目は 34 節からのエフタの娘の悲劇です。エフタはアモン人との戦いを前にしてこのように誓っていました。30～31 節：「もしあなたが確かにアモン人を私の手に与えてくださるなら、私がアモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る、その者を主のものといたします。私はその者を全焼のいけにえとしてささげます。」エフタは、もし主が勝利を恵んで下さるなら、私は何を代わりに差し出しても良いと考えました。そうしてとっさに思い浮かんだ最高の犠牲が今の内容でした。ささげる人を最初から決めていたのでは、都合の良い条件を提示していることになりかねません。しかし「一番最初に出て来る者」とすれば、エフタ自身も大きなリスクを背負うことを意味します。エフタは「それほど私はあなたに犠牲を払うのですから、あなたは必ず私に勝利を与えて下さい」と願った。一見信仰的ですが、その本質は「神との取り引き」であったことを前回見ました。神は私たちが祝福を受け取る手段として、ただ「信仰」だけを定めておられますが、エフタはただ主の恵みに信頼するだけでは不安で不安で仕方がなくなり、「私はこうしますからあなたはこうして下さい」という交換条件を出して主を縛ろうとした。信仰の原則ではなく、肉の感覚に分かりやすい「ギブ&テイク」の原則にすりかえて、神を自分の思う通りに操作しようとした。果たして結果はどうだったのでしょうか。

彼がミツパの自分の家に着いた時、まず最初に出て来たのは何と自分の娘でした！しかも彼女は一人子であって、エフタには他に男の子も女の子もなかったとあります。その最愛唯一の娘がタンバリンを鳴らし、踊りながら出てきた。本来はほほえましい出来事が最悪の事態となります。エフタは 35 節で自分の着物を引き裂いて言います。「ああ、娘よ。あなたはほんとうに、私を打ちのめしてしまいました。あなたは私を苦しめる者となった。私は主に向かって口を開いたのだから、もう取り消すことはできないのだ。」

この記事はいかに軽々しい誓いを神は罰したもうかということを示しています。エフタは神の祝福と取り引きしようとしたしましたが、主はここで問うておられるのです。「あなたは何でも払うと約束したが、本当にそれで良いのか。このような仕方で祝福を得ることを求めたのはあなた自身であるが、それはあなたにとって良いことなのか。わたしの祝福はこのような仕方で勝ち取られるべきものなのだろうか。」と。

さらに驚かされることは、エフタが自らの誓いに従ったことです。私たちだったらどうでし

よう。おそらく、「ああ神様、それだけではできません。まさかそんな風になるとは思っても見ませんでした。ですからどうかこれだけは勘弁して下さい。」などと言って後ろに引っ込んでいくのではないのでしょうか。頼む時だけ、何でもします！と威勢の良いことを言っておいて、いざそれをする段になると、やっぱりできません、と勝手な撤回を始める。しかしここではエフタもその娘も、この誓いから逃れようとはしていません。エフタの娘は 36 節でこう言っています。「お父さま。あなたは主に対して口を開かれたのです。お口に出されたとおりのことを私にしてください。主があなたのために、あなたの敵アモン人に復讐なさったのですから。」こうしてこの親子は泣き悲しみつつ、誓願を果たすことへと進んでいきます。果たしてこれはどう考えたら良いのでしょうか。やはり誓ったことはこのように最後まで果たさなければならないということを、この箇所は私たちに教えているのでしょうか。それとも何か別の道は考えられるものなのでしょうか。

まず私たちが押さえておかなければならないのは、誓いは当然果たさなければならないということです。民数記 30 章 2 節：「人がもし、主に誓願をし、あるいは、物断ちをしようと誓いをするなら、そのことばを破ってはならない。すべて自分の口から出たとおりのことを実行しなければならぬ。」 伝道者の書 5 章 4 節：「神に誓願を立てるときには、それを果たすのを遅らせてはならない。神は愚かな者を喜ばないからだ。誓ったことは果たせ。」エフタとその娘は、このような主の要求を最大限に受け止めました。どんな犠牲が伴っても、神の前に一度誓ったことは必ず守らなければならないと。後で触れますが、これは私たちが大いに見習うべき姿です。しかし、ではこの場合、エフタが娘を全焼のいけにえとしてささげたことは避けられないことだったのでしょうか。参考になるのはサウル王の愚かな誓いです（1 サムエル 14：24～45）。この箇所では明らかにされているのは、サウル王の誓いの愚かさです。これは愚かな誓いは守る必要はないという事例として考えられます。

また新約聖書でもイエス様は、ある人が両親のために差し上げるべきものを、「これはコルバンになりました」と言うことによって、何もさせないようにしている、と批判された箇所があります。その人は「私はもう誓ってしまったから、今さらそれを変更して両親のために使うことはできない」という言い訳にしていました。しかしイエス様はそれを良しとされませんでした。なぜなら、その誓いは十戒の第 5 戒「あなたの父と母を敬え」というより重大な戒めを破るものだからです。一つの誓いを守って、他の戒めを破るなら、何の良いこともありません。せめて愚かな誓いをした自分を大いに反省して、重ねて罪を犯さないようにしなければなりません。

エフタのケースもその線に沿って考えることができます。誓いを守ることは大切ですが、人間の犠牲を神が喜ばないのは確実なことです。むしろこの忌み嫌うべき習慣のために、カナン人はその土地から追い出されると言われていました。ですから彼はその娘をささげるべきではなかったのです。しかし残念ながら、エフタもその娘も、人間の命がそんなに神の御前に尊いものであり、神はこのようなことを喜ばれないということが分からなかった。聖書は創世記 1 章ですでに、神のかたちに造られている人間の高貴さ、尊厳さを語っていますが、士師記の時代のイスラエル人はカナン人と混じって生活する中で、その影響を深く受けていたのです。こ

れはイスラエルがカナン人を追い払わずに一緒に住んだことの代償であり、自ら引き寄せた霊的暗黒です。ちなみに私たちはすでに人間の尊厳に対する十分な理解を持っているかのように錯覚してなりません。もし私たちが聖書に従って、一人一人が神のかたちに造られた人間であることを本当に知っているなら、どうして他者に対するひどい言葉やひどい態度を取れるのでしょうか。私たちが聖書に従って、人間とは何者か、どんなに光栄ある者として造られているのかを学び、そこから正しい生き方が益々導かれなければなりません。

このようにエフタの記事は大変残念なものではありましたが、私たちはこれを単に不必要な犠牲を払った愚かな例としてだけ見るべきではないでしょう。確かに彼らには神の御心についてのある種の無知があり、そのために悲しい行動を取ってしまいました。しかし一方で、このような犠牲を払ってでも主への誓約を果たそうとした彼らの姿は、すべての時代の者に大きなチャレンジを与えるものではないでしょうか。私たちは今や、エフタの時代以上に神の御心についての光を頂いているのですから、彼らと同じ行動は取りません。しかし私たちは与えられているより多くの知識に基づいて、エフタが示したような忠誠をどのように主に示す者でしょうか。私たちは自分の約束を主に果たすことにおいて彼のように熱心かつ真剣であるのでしょうか。そのことはこの記事を通して、すべての時代の信仰者が問われていることです。

さて、今の悲劇にもう一つの悲劇が加わったのが 12 章前半です。戦いを終えたエフタのところへエフライム人がやって来て文句をつけます。士師記 8 章でも見ましたが、エフライム人はいつも自分たちが一番で、人々の賞賛の中心にいないと気が済まない人たちでした。彼らはエフタの成功に対する嫉妬心から、「あなたが私たちに呼びかけもしなかったことは、大いなる侮辱である。私たちはあなたの家をあなたもろとも火で焼き払う。」と激しい言葉で迫ってきます。そして 4 節で「ギルアデ人よ。あなたがたはエフライムとマナセのうちにいるエフラムの逃亡者だ」と軽蔑の言葉を発したことをきっかけになって戦いが始まります。この戦いはエフタ率いるギルアデ人が優勢に進めたようです。そしてエフライムの逃亡者を見分ける方法として、「シボレテ」という言葉を言わせたことが 5 節 6 節に書いてあります。ペテロがガラヤヤ弁で主の弟子であることが見破られたように、エフライム人もこれで見破られてしまいます。そして 4 万 2 千人という非常に多くの兄弟たちが死にました。主はイスラエルをあわれんで勝利を与えて下さったのに、エフタの家では嘆きの歌が歌われ、イスラエル内部でも兄弟同志が傷つけ合っている。いくら主が素晴らしい救いを与えて下さっても、人間が災いと不幸に変えてしまう。こんなイスラエルに一体誰が希望をもてるのでしょうか。いくら主が救って下さっても、彼ら自身が主の救いをいつもこのように台無しにしてしまうだけではないのでしょうか。

しかし 12 章後半には、主がなおも次の士師たちを立ててくださった記事が続いています。3 人の小士師、イブツァン、エロン、アブドンです。彼ら一人一人について詳しいことはほとんど分かりません。私たちの目に留まるのは、まずイブツァンに 30 人の息子がいて、30 人の娘を自分の氏族以外の者に嫁がせ、30 人の娘をよそからめとったことです。これはイブツァンの豊かさ、繁栄、またその時代の安定ぶりを示すものでしょう。二人目のエロンについては彼が活躍した場所およびその期間以外のことはほとんど分かりません。3 人目のアブドンは、イ

ブツァン同様、たくさんの息子や孫がいたことが記されています。ろばは平和を象徴する動物ですから、この時代が比較的静かで、安定し、主の祝福が見られた時代であることを暗示しているのでしょう。ここから思わされることは、士師記は一般にイスラエルの暗黒時代と呼ばれていますが、ずっとそうだったのではないということです。その間、間にはこういう一息つけるような平和な期間も散在していた。ここにも主の大きなあわれみがあかされています。主は10章13節で、もうあなたがたを救わない、と真剣に仰っておられました。怒るに遅い主がそういわなければならないほどのイスラエルの状況でした。しかし主は彼らの苦しみを見るに忍びないと思って下さり、エフタを通して救いを与えて下さいました。なのにイスラエルはその祝福をみごとに台無しにしました。もうこんな彼らでは見切りがつけられてもおかしくない！主はよくここまで忍耐された、頌栄！と言ってイスラエルの歴史が閉じられてもおかしくありませんでした。しかし主はなお次の士師たちを立てて、イスラエルに平和な期間を与えて下さった。ここにイスラエルをなおもあわれまれる主のお姿があります。神の民であるよりはカナン人のように変わり果てているボロボロのイスラエルをなおも求め続けてくださっているお姿があります。私たちはここに、主はどのようなお方でられるか、しっかり仰がなければいけないのではないのでしょうか。そしてこの主の忍耐と憐れみによって今日の私たちも支えられていることを思い、心からの感謝を告白すべきなのではないのでしょうか。

そしてこのイブツァン、エロン、アブドンと続けて士師をお送りくださった主を仰ぐ時に思わされることは、主はこの深いあわれみによってついにご自身の一人子を私たちに遣わして下さいということ。ここに私たちは大いなる希望を持つのです。なぜなら、士師記において士師たちが遣わされたことは主からの大きな祝福でしたが、この書が強調しているように思われることは、その彼らによって与えられた救いは常に不完全であったということ。新しい士師が立てられ、今度こそ神の素晴らしい祝福を！と期待しますが、最後にはいつも後味の悪いものが残る。そして首うなだれて、次の士師を待つより他ない。しかし私たちは今や知っています。今や主はまことの士師を送って下さったことを。その方において、私たちは繰り返しの幻滅・落胆に終止符を打ち、全き救いにあずかることができるということ。

イスラエルの民を見捨てることなく士師を立て続けて下さった主を仰いで今夕、御名を賛美したいと思います。それと同じ憐れみによって、今日も自らが生かされていることを主に感謝申し上げたいと思います。そして今や主がまことの士師を遣わして下さったことを感謝して、そのまことの士師に信頼し、その方の御言葉に聞き従い、その方の恵みの力によって引き上げられて、救いの祝福の中を進む民の歩みへ導かれて行きたいと思います。